

北海道と沖縄の天理教 — 風土と歴史から —

北海道と沖縄、日本の両端に存在する二つの地域への天理教伝道はいろんな問題を提起している。

北海道には現在 960 余もの教会がある。府県別では大阪、兵庫、東京に次ぐ 4 番目の多さである。広大な面積を有し、人口も約 550 万人 (2010 年) と多い。これは教会が多く存在する条件の一つである。しかし日本の最北端に位置する北海道になぜこんなに多くの教会が誕生したのだろうか。一方、沖縄の教会は 21 である。日本の南西端にあり、沖縄本島以外は小さな島ばかりで、人口は北海道の約 4 分の 1 である。しかし教会数にこれほど差があるのは何故だろう。両地域とも教会本部から遠く、距離的に大差はない。

二つの地域を例に伝道の様態を考えたい。なお、誤解ないように述べるが、北海道に比べ沖縄の教勢が振るわないことを言おうとしているのではない。歴史や風俗、習慣から両地域の歴史的経過を経た現状を考えようとするものである。

教祖お一人から始まった天理教が遠方へ広まる場合、ごく一般的に考えると教会本部からの距離によって、伝播時期や現状の教勢、例えば教会数などに差が生じると言える。つまり近距離地域には早く教会が誕生し、現在も比較的教会数が多い。これが一般的、常識的な了解である。しかし常識的に考え得る事象ばかりではなく、例外もあることを知らねばならない。

北海道と沖縄はどちらも教会本部から「遠い」所である。しかも両地域は、その他の日本本土と比べ文化や風土において異質なものを持つ。両地域への伝道は日本国内と言えど異文化伝道だと言えるかもしれない。

明治初期まで、北海道の大部分はアイヌの人たちの生活空間であった。寒冷地ゆえ農業に適さない所だったが、その後和人が入植し国策として大々的に開拓される。もちろん天理教の歴史もそれから始まる。

北海道に最も早く天理教を伝えたのは北前船の船乗りであろう。北前船関係者に信者がいた。その人たちが北海道の港に神様の話を伝えたようだ。おそらく小樽周辺であろう。明治 10 年代というから相当早い。これは伝道を目的としたものではなく、仕事のついでに信仰を伝えたものである。

明治 20 年代前半には北海道で布教する人が現れる。伝道を目的として渡道した人もあるが開拓のため移住した人が信仰者であったり、開拓と伝道の両方を目的としていたり、北海道の天理教史は開拓と何らかの関係をもって展開される場合が多い。

北海道開拓は国策の影響もあって日本全国から (実際には東北や北陸出身者が多かった) 移住者がやってきた。屯田兵として開拓と警備を兼ねた人たちもいた。

広大ではあるが厳しい自然環境の土地を移住者によって開拓してきた歴史があり、北海道は他の日本の地域とは少し異なった独特の文化、風俗を培ってきた。そこに天理教伝道も見なければならぬ。一般に新しい宗教がよそから入ってくる時、身構え、拒否反応を示す。しかし北海道の場合、少数のアイヌを除く全ての人々がよそからの入植者である。その点、壁がなく平等に受け入れてくれる素地があった。故高野友治天理大学教授が「北海道はハッピーを着て街を歩いても奇異な目で見られるこ

とがない」と話していた。

現在の教会で言えば、雨龍大教会は新十津川開拓から始まり、旭川付近にある秦野系統、亀岡系統の教会も開拓村との関わりから始まった。さらに、洲本系の伝道も信仰を持った人が北海道へ入植したことから始まったという。開拓と関わった本教伝道が多い。もちろん、開拓とは関係なく伝道を試みた人もあったであろう。しかし、明治期の北海道伝道はほぼ開拓と何らかの関係を持っていたのではないか。

北海道の教会系統数は非常に多い。入植者が全国各地からやってきたことと同じように伝道者も全国の教会からやってきたので、教会系統が多くなった。

沖縄の天理教は何度も言って失礼だが教会が 21 のみである。しかし、沖縄のようぼく数はけっして少なくない。教会数が沖縄の 2 倍以上もある地域 (教区) と同等、もしくはそれ以上のようぼく数である。

県別のようぼく数は大阪や奈良など近畿の各府県に多い。教会本部に近いところが多くなるのは自然であろう。したがって日本国内で教会本部から最も遠い沖縄にかなりのようぼくが居ることは注目すべきことであろう。こうした現在の状況を作り上げた沖縄伝道者の努力に敬意を持たねばならない。

沖縄は日本とは別の王朝が長く栄えた歴史をもつ。北海道以上に独特の文化を有している。宗教においても祖霊崇拝が強く、お墓が豪華なのはその表れ。あちこちに見られる「御獄 (うたぎ)」や「石敢当」の文字も同様で民間信仰が生きている。

沖縄に天理教が根付くには人間の幸せ (陽気ぐらし) のためには祖霊崇拝や民間信仰より天理教の方が優れている事を示さねばならなかったという。那覇分教会の初代をはじめ沖縄の布教師はこうした苦勞の末、従来からある沖縄の信仰をのりこえたからこそ現在の天理教がある。沖縄に天理教を伝道し、広めた先人はまさに異文化伝道をなしたと言えるのではないか。

沖縄に最も早く天理教を伝えたのは那覇分教会創立者 (2 代会長) と沖縄分教会初代であろう。那覇分教会の創立者は鹿児島に出ていた沖縄の人だった。明治 41 年、郷里沖縄に帰り布教した。民間信仰が根強いので火の神や水の神など古来からある沖縄の信仰を譬えに天理教教理を伝えた。「珍しい大和ユタ」と評判をとったという。沖縄分教会初代は奄美の人で、島伝いに布教しながら沖縄本島に渡った。明治 41、2 年のことである。易で糊口を凌ぎながら天理教を全く知らない沖縄の人たちに伝えて歩いた。内地とは違った苦勞を重ねながら沖縄に天理教を根付かせた先人の信仰信念は立派だと言える。

沖縄伝道の先人は文化、風土の違う沖縄に教理を説明するため「八つのほこり」を琉球言葉に当てはめたという。最後にそれを紹介してこの項を終わる。

アタラサ (をしい)、フウサ (ほしい)、ミックアサ (にくい)、カナサ (かわい)、ウラミ (うらみ)、タンチ (はらだち)、ユク (よく)、チイダカサ (こうまん)

タンチは「短気」、チイダカサのチイは「気持ち」の意。気持ちが高いという意味になる。

(北海道、沖縄の伝道についてはもう一度触れる予定である。)